慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九九五年度修士論文要旨；一九九五年卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.4 (1996. 6) ,p.137(461)- 150(474)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960600-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九九五年度修士論文要旨

［日本史学専攻］

鑑真に関する一考察
――その日本への影響を中心として――

李迎久

本稿では鑑真和上が来日前後の日本の仏教事情、主として受戒の変遷を検証することによって、鑑真和上の来日の意義を再検討したものである。

仏教には戒律というものがある。戒とは在家信者の遵守すべき徳目などを含む名称であり、律は出家の犯行を禁止する規則であるが、両者に共通するものが多いことから、同一視されるようになった。仏教に帰依する時、戒律を守ることが要請され、それを受け、遵守することは出家の必要条件である。

日本では、敏達天皇十三年に蘇我馬子が石像供養の為に、初めて三人の尼に出家させた。しかし、その後、政府は度縁で僧尼が生まれることを認めたので、戒律上の問題は触れられなかった。また、現実に僧尼は課税を免除される為、百姓が大量に出家し、租税の負担から逃がれようとした。これによって、僧尼が無統制、無規律の状態に陥って、社会秩序の混乱をもたらした。そこで、律令国家は国の護持を図ろうと「僧尼令」を実行したが、あまり効果が見えず、「仏教の流伝は、必ず僧尼に在り」、「今日本の素緇の行ふ仏法の軌模を察るに、全く大唐の道俗の伝ふる聖教の法則に異なり」と気付き、更に舎人親王の助言を得て、栄叡・普照の両僧を遣唐使に付けて戒師の招請に大唐に向かわせた。

鑑真は揚州の出身である。十四歳の時、仏像を見て感動して出家を申し出た。その後、菩薩戒、具足戒を受けて、一人前の僧侶となって、中国の江南地区で伝戒を行った。

入唐した栄叡・普照は鑑真の名を聴いて、日本の伝戒の師になって欲しいと鑑真に要請した。鑑真は弟子たちの反対を押し切って、身の安全が保証できないことを承知した上、東渡を決意した。五回も失敗した上、天平勝宝六年にやっと六回目の航海が成功し、日本の秋妻屋浦に上陸することができた。

来日後の鑑真は東大寺で戒壇を開き、授戒をし、さらに「授戒伝律、一任和上」と天皇から重任を任せられたが、実行は簡単なことではなかった。

大乗戒の受戒の方法として仏教の前で戒律遵守を誓う自誓受と師に従って戒律を受ける従他受があった。日本では戒師がいない為、自誓受を貫いてきたが、鑑真の受戒の方法は従他受だった。従って、鑑真が従他受による授戒を執行しようとすると、志忠・霊福・賢璿の人達が従来の方法を固持しようと強く反発をした。結局はこの人達の新戒の受持によって解決されたが、戒律上の相違がここで見えた。

宝字二年に、自分の意志によって高齢の鑑真は大僧都の任から退いた。当時、僧になるのに五年間戒律を勉強することが条

件とされた。鑑真は戒律を目指して上京した僧侶たちに勉学の場所を提供しようと、僧綱退任後、新田部親王の旧宅と備前国水田一百町を利用して、私寺の唐招提寺を建立した。この唐招提寺の建立は日本仏教の更なる繁栄をもたらした。

鑑真の日本での仏教活動によって、日本の僧尼たちが戒律に対する誤解が糾され、正しい戒律が伝授されるようになった。又、日本で戒壇が建立されて、授戒の資格をもつ戒師が生れ、日本では独立した授戒体制が形成された。

鑑真の来朝は日本の仏教界にとって重大な意義を持っている。

中世後期の疾病と社会

水谷惟紗久

日本中世の闘病のありかたとして、病院制度と医師資格を伴わないことがあげられる。そのため、病と闘病は個人的な出来事であったのであり、様々な治療、医療のありかたがそこに見られた。それらを一つ一つ見ていくのが本論文の目的である。

病院制度と、医師資格を持たない社会では、医療と投薬には医者と患者の間の人格的関係が重要である。『康富記』応永二十七年九月十日条にみられる、医師高間が狐つきの疑いで捕縛された事件は、その逮捕の決め手となったのが修験者による加持であったように、医師が祈祷師等と別のものとされず、そのために医療技術そのものではなく、人格的性格が主として医師と患者の信頼を規定していたことを象徴している。

室町時代の公家社会では毒殺の噂が語られるにもかかわらず、出所の不確かな「異様の」医師に診察させるように、医師と患者の関係は安定したものではなかったと考えられる。そのため、患者は一回の闘病において、いく度も担当医師を変えており、また莫大な成功報酬が例えば「お湯はじめ」の時に支払われている。

一方で、『尺素往来』に見られるように、薬は常備薬として備蓄される事があり、『山科家礼記』などには山科家雑掌大沢を中心にした、家伝薬の調合の記事を見ることができる。これら、家伝薬は贈答品として、または知り合いの病にたいする見舞品として人々の間を行き来していた。ここで行き交う薬品類は、医師が処方する薬と少し異なる性格をもつようになる。香薬類が多く、普段からしばしば服用されていたようである。これらの家伝薬が、医薬とどのように違うか、ということは、『言経卿記』の天正十三年の、言経大坂下向をはさんだ時期の記事を見ていくと知ることができる。すなわち、下向後は、生活上の必要もあって医師として生活しはじめるが、そのころには、家伝薬の投薬は、京にいるころにくらべて著しく減っていて、多種の医薬が用いられていることを考えれば、医師が処方するところの医薬と、人々の間の贈答薬とが異なった性格のものであるといえる。

室町時代になると、医師の絶対数が増えてくるが、それとは別に薬が流通する社会ができあがっていた。比較的入手しやす

い薬種で生産される黒焼が民間医薬として伝来し、近世になると、国内の広い層に受け入れられたが、この黒焼が、薬文化を広めていったと考えた。

このように人々の闘病と、それを支えた薬のありかたについて、いくつかの古記録から見ていく試みである。

十七世紀の農業発展と村落社会
――瀬戸内地方を中心として――

磯田　道史

十七世紀は、中世が終りを告げ、近世的な社会経済の仕組みが確立した時代である。「小農自立」や近世村落の成立が全国でみられる。しかし、中・近世の違いが、どのようにして生まれてくるのかは、十分に明らかにされていない。

そこで、本論文では、①近世の集約型農業は、どのようにして形成されたのか、②中世的な土豪の村から、近世的な村落秩序は、いつ、いかにして確立してきたのか、という二つの問いについて考えた。備前・備中・美作・播磨を分析の対象とし、灌漑施設数・牛馬数・牛小屋数・家族形態などの時系列的変化に着目するなかで、次のようなことが明らかとなった。

近世集約農業の始動に先立って、まず第一にみられたのは、灌漑の向上であった。十七世紀前半までは、灌漑条件の地域差が大きく、いわゆる「日損所」の割合が高かった。そこで、領主財源による溜池の築造など灌漑開発が活発に行われ、十七世紀中頃から、徐々に旱害の緩和がみられはじめた。

この灌漑の改善をうけて、近世多肥農業が普及している。山野の草・牛馬糞が肥料として徹底して利用されるようになり、農業生産の発展を牽引するようになっている。十七世紀中頃の段階では、草肥（厩肥）が主な肥料である。村々では、肥草を刈るため、採草地がひろげられ、牛の飼養数が急速に伸びている。この多肥農業の成立にともない、農業経営にも注目すべき変化が起きている。草肥（厩肥）は多大な人の労働と牛馬利用が不可欠で、瀬戸内農村の場合、《牛持・草肥・犂鍬併用・労働集約型》の特徴を備えた家族小経営の増加が進んでいることを指摘した。

また、村落秩序の面でも変動がみられる。近世初期の村落では、土豪の庄屋を中心にした村落秩序が存在した。しかし、土豪庄屋は、小百姓・家族小経営の成り立ちをあやうくする場合が少なくなく、この時期、村方騒動が頻発している。これに対して、岡山藩では、庄屋を惣百姓に選ばせる入れ札を実施し、惣百姓も参加した形での新たな村運営の形成を促進している。藩の介入と村方騒動の結果、延宝期には従来とは異なった近世村落秩序の成立がみられる。

以上のような流れでもって、十七世紀の瀬戸内農村では、農業が近世的な発展をとげ、社会的な面でも、近世の扉が開かれつつあったことがうかがえる。

〔東洋史学専攻〕

春秋後半の晋における「県」管領者併呑と「三軍体制」の残骸について

丸山　雄

春秋・戦国時代は、中国史の中で注目すべき変革期の一つであり、政治史の大きな流れからみれば、春秋中期以降における各国の邑制国家から領域国家への変貌という形勢がある。本稿は、春秋後半の晋を対象にして邑制国家の崩壊過程を跡付けようと試みたものである。従来の研究、及び最近年の研究史整理は、春秋後半の晋において「県」を支配していくのが各世族であり、「中央権力」を構成し政治に参与するものも各世族であることから、地方の変遷と中央の変遷が聯動することを示唆しており、本稿もそれぞれについて問題を限定して論を試みた。

先ず地方については、従来、戦国王権に先行する韓・魏・趙を含む各有力世族が「県」支配を遂行していく過程が論じられてきたのに対して、そこに併呑される側に立って特に弱小世族について考察し、「党」、「娶」、「属大夫」、「嬖」というようにその形態は一様でないものの前6世紀後半に有力世族の勢力下に組み込まれる乃至は入っていくこと、前5世紀前半には弱小世族の一族子弟、分族した者の多くが有力世族の下に家臣化されることを確認した。

次に、中央については、近年軍制の面のみ強調されている三軍の問題を取り上げ、伝統中国以来官制としての側面も併せ持つと考証されてきた論点を再評価し、三軍将・佐の他、御・右・軍尉・司馬等も含めて「三軍体制」と一括し、その性格、変遷、背景を考察した。従来の研究で指摘されているようにそれらが序列・地位として機能することを確認し、また『左伝』を中心に散見される関係記事を拾い、その内三軍将・佐が「将某軍」、「佐某軍」、「佐之」という一定の書式を持って現れる事例を戦時におけるものと平時におけるものとに分別して考察すると、春秋末期に近づくにつれて三軍の人的基盤の比重が「国」（国都）から「県」に移っていくことを背景に、「三軍体制」の枠組が形骸化していくことが認められる。

〔西洋史学専攻〕

第2帝政末期における中央党の動向
――マティアス・エルツベルガーと和平決議――

森川　裕美

一八七一年の結成から一九三三年の解散に至るまで、中央党はドイツの政治を左右する大きな影響力を保持していた。カトリック政党としての特殊性から、議会内で築いた地位の基盤や独自の政策路線については多くの研究がなされてきた。それにもかかわらず、一九一七年に迎えた中央党の活動上、重要な位

置をなす政策転換、いわゆる左旋回については十分に説明されているとは言えない。本稿は、左旋回の発端となった和平決議を、それを推進した中央党議員エルツベルガーの行動を通じて検討し、ヴィルヘルム期以降、中央党が経てきた変革過程の一環として考察しようと試みるものである。

文化闘争の終結は、中央党にそれまでのような宗派の権利の擁護ばかりでなく、経済的・社会的利害の解決にも関心を向けさせた。多様な社会層から構成される支持基盤の大半を占める中小農民や下層中間層の発言力の増大は、党を大衆に支持基盤を持つ利益政党へと変容を遂げさせた。党の宗派性や労働組合をめぐる問題は、その動きに拍車をかけた。党内部の変動を反映し、対立する利害を調停しつつ、より能率的な運営を担う存在として、指導層にも貴族に代わり、党内左派に位置する教養市民層が新たに台頭した。エルツベルガーは出自、活動ともにこのような党の変遷を象徴する人物であり、彼の活動の分析は中央党の政策や党がはらんだ内部矛盾などの問題も明らかにできると筆者は考える。

常に保守勢力と組むことで議会内での発言権を確保してきた中央党は、一九一七年に初めて積極的に、後のワイマール連合への参画の布石となる左翼政党との提携を実現させた。そこで、和平決議案の作成のために、社会民主党・進歩人民党・中央党を中核として設置された党派連絡委員会での中央党の態度を検討した。エルツベルガーが複数の議題の中から和平決議をたびたび強調することで、支持層内で対立する利害を避けながら、交錯する諸政党の思惑の中で委員会の主導権を獲得していく過程が現れる。同様に党内においても、彼を中心とした党内左派勢力へと権力の重心が移行する決定的要因になったことは明らかである。エルツベルガーの行動の背後には、大戦末期であることや指導部に行動の自由を与えやすい党の構造上の問題もあろう。だが、党の政策転換は従来理解されてきたようにエルツベルガー個人に帰するだけではなく、中央党が文化闘争の終結以降、経てきた変革の一つの帰結であると考えられよう。

〔民族学考古学専攻〕

東北地方頁岩産地帯における石器石材の利用
――山形県お仲間林遺跡を例にして――

渡辺　丈彦

先史時代の石材及びそれを運ぶ人の移動に関する従来の研究は、その石材産地と、消費地との関係から論じられることが多かった。その為、遺跡から出土する石器の原材が如何なる場所から運ばれてきたかを理化学的に推定する、いわゆる石器石材の産地推定が研究の主体を占めてきた。しかしながら、石材産地から石材が如何に搬出され、そして如何に消費地に搬入されたか等の具体的な石材移動の実態は明らかにはされてはいない。

よって本論においては、石材産地を至近に擁する遺跡での石材の利用・供給のあり方を、いわゆる消費地遺跡での石材の入

手・利用の様相を念頭に置きつつ明らかにすることを研究目的とした。具体的には同一流域内に立地し、しかも定形的石器の組成が近似しているため、比較的近い時期に比定されながら、石材入手に関する自然環境では大きく性格を異にする2遺跡（山形県西川町お仲間林遺跡と新庄市南野遺跡）を、石器石材の利用という観点から比較検討した。

分析の結果、大入間川河床を中心に遺跡周囲に良質で豊富な硬質頁岩が分布し、従来、「原産地遺跡」の性格が強いと指摘されてきたお仲間林遺跡においては、石刃技法を用いた石器製作の全工程が観察され、しかも石器製作の際に原石の岩質（具体的には石材表面の肌理の細かさ）、形態、重量などに基づいた石材選択が行われていることが明らかとなった。

また、遺跡至近に硬質頁岩の産地を擁しない南野遺跡においては、石刃技法を用いた石器製作の後半の工程すなわち素材剝片である石刃の二次加工の段階しか観察できず、遺跡外から定形的石器の素材となる石刃を搬入した可能性が高いこと、そしてその石刃の表面の肌理が総じて細かく均質であることを指摘した。そして、南野遺跡に搬入された石刃の肌理が細かく均質であることについて、お仲間林遺跡の様な「原産地型」遺跡から肌理の細かさに基づいた選択を受けて製作された石刃を搬入した可能性が高いためであると解釈した。

富士講の発展と衰退

原　奈緒

富士講とは富士山への登山と参拝を目的とした信仰集団で、地域社会単位で構成され、地元でも信仰行事を行う。富士講は江戸中期に発生し、江戸文化文政期には「江戸八百八講」と言われるまでに隆盛を極めたといわれており、現在も僅か数講が存在している。既存研究では富士講を江戸文化として考え、文化文政期に最盛期を迎えた富士講が、江戸幕府の禁令によって衰退してしまったと考え、明治以降の富士講を軽視する傾向にある。例えば民俗学者の宮田登は、江戸期の富士講の信仰の中核は日本民族のエストたる「ミロク世信仰」であり、これが禁令によって失われ、富士講も衰退してしまったと述べている。筆者は明治以降の富士講が軽視されていることに疑問をもち、従来の富士講研究では無視されていた富士講石造物を資料に分析を試みた。上吉田地区の富士講石造物の分析によると、幕府による禁令は富士講に大きな影響を与えず、むしろ明治以降の一年当たりの富士講石造物が増加しており、明治以降の富士講が軽視できない存在であることが明らかになった。また江戸期の富士講石造物の碑文の中には、宮田のいう「ミロク世」の記述がなく、富士講の思想に関する記述も殆どない事から、江戸期富士講の信仰の中核を富士講の思想と捉え、それだけで富士

講の発展を説明するのは無理があることが明らかになった。その上で筆者は、各時代の富士講の性質を変容させ、富士講の発展と衰退の要因となっている富士講の一側面として、富士講に於ける交通と地域社会との関連を強調した。明治以降の富士講では、鉄道の開通が上吉田の富士講石造物数の激増を産み、富士塚もむしろ明治以降に増加していて、ツーリズムとしての富士講が受け入れられた時代として明治期から昭和前期までを捉える事が出来る。また交通の発展は戦後の富士講の衰退の要因ともなっている。講を結成する地元においての交通の発展が生業を変化させ伝統的地域社会を崩壊させつつある。また富士山への交通が便利になりすぎたことは、富士講の信仰面娯楽面での相対的価値を低下させている。

従来の富士講研究は文献資料のみによって行われてきたが、従来の研究で無視されていた考古学資料を使用し、それを文献記録や伝承資料と結びつけて考えてみることにより、新しい富士講像を得ることができる。近世を対象とした歴史の復元に際しては、文献記録のみでなく、考古学的資料や伝承資料を併用することは有効である。

ポリネシアの先住民伝承
――土地と物語の風土論的考察――

三浦　直彦

ハワイの神殿ヘイアウ、養魚池、水路をめぐる起源物語では、その土地に住んでいるとされるメネフネと呼ばれる小人たちが、それらの建造物の担い手として活躍する。伝承のなかでこのメネフネは、ハワイの先住民であるとされる。ハワイのメネフネのように、島の先住民としてとらえられ、超自然的な力でさまざまな人間の活動に関わる存在の物語は、ポリネシアのハワイ以外の地域でもみとめられる。ニュージーランドではパトゥ・パイ・エレヘ・レンネル島、ベロナ島ではヒティ、ティコピア島ではフィティ・カイ・ケレが島のさまざまな場所にある石の壁、島の景観の作り手、生活技術の伝え手として語られる。

伝承を民族の歴史を再構築するのに利用する立場をとる研究方法からすると、ポリネシアの先住民伝承のような架空の物語はその取り扱いに注意を要するものであるとされる。しかしながら、事物が超自然的な力の産物としてみられることが多くあるポリネシアの島々では、島の人々にとってはこのような空想的と思われる話が、重要な意味を担うことになる。ポリネシアの超自然的な存在としての先住民たちが、その土地の景観や建造物の造り手として語られるとき、それは史実として語られるのではなく、その土地の人々が持っている土地の記憶として語

られるのである。

神々や文化英雄の行為を語る物語が比較的抽象的、一般的に語られるのに対し、先住民の行為は特定の地域の景観、建造物と深い関わりを持つことが観察される。神話のつながりとして、先住民を介して自分たちの土地に物語を語りかけることにより、ポリネシアの人々は自分たちの環境を人間化していった。そこには、神々によって人間の住む場所が与えられ、文化英雄によって自然の環境が整えられたあと、先住民としての小人たちが彼らの持つ超自然的な力とともに、人間の事跡に関わってくる様子がみられるのである。

一九九五年卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

中世の賤民芸能―千秋万歳の発展成長について―　秋尾　由佳
昭和のヒーロー長島茂雄
―ジャーナリズム（雑誌報道と新聞報道）を通して―　秋元　隆
鎌倉幕府による御神楽について―鶴岡八幡宮を中心として―　池和田有紀
是政と、そこに住む人々　入田　悦子
港湾都市兵庫の支配形態　岩橋　孝一
鈴木商店興亡にみる国益指向性について　内田　晶子
室町期における在地領主制の変質について
―安芸国沼田荘小早川氏を中心に―　大澤　徹
野田の醤油　奥山真木子
日本における資本の本源的蓄積―地租改正を中心にして―　川部　高裕
日本に於ける軍隊教育について　神頭慎太郎
幕末の人間模様と社会情勢
―吉田松蔭と入江九一・野村靖兄弟に見る師弟関係―　菊野美穂子
古代の瀬戸内海における地域の交通　木村　光孝
沖縄基地の問題点　木村　華子
近世江戸庶民の食文化　河野　裕子
共同印刷労働争議とそれにかかわった人々　小林　千夏
中世八朔考　坂口　美紀
古代日本の都―平城京・平安京―　佐野　直人
九州における惣領制の変質過程とその特徴
―肥後国相良氏を中心に―　清水　亮
情報の流れから見る明治維新―仙台藩伊達家の場合―　志村　暁之
村落における若者組の自治性
―長野県下伊那郡座光寺村の若者組を通して―　須田　一宏
平安貴族女性に見る現代のジェンダー問題の発生過程　高橋　如子
近世対馬藩の藩制について―府士の構造と職制を中心に―　田崎　正雄
近世江戸の引札　淡中　清子
終戦直後における文部省の「自主的改革」についての考察　柄越　祥子
「信州の鎌倉」信濃国塩田庄と塩田北条氏に関する一考察　中垣　由佳
口宣・口宣案―その古文書学的位置付けについて　羽田　聡
佐倉惣五郎に関する初期史料と印旛沼渡しについての研究　平本　正敏
公議政体論に関する一考察　藤田　充央
桃山の美―わびについて―　松田　郁子

福澤諭吉の思想にみる「教育者」的一面と「独立」の問題　松本　壮平
一五年戦争期日本国家の本質　宮澤　英樹
中世に於ける塩業—伊予国弓削島荘を中心として—　横山　泰幸

〔東洋史学専攻〕

コミンテルンと中国共産党—第一次国共合作の成立五十嵐　英
一九三〇年代の江蘇省淳化鎮教会による農村建設　石川　浩子
景徳鎮の御器廠について　衣斐　郷志
清代における旌表制度について
—『光緒恵州府志』「列女伝」からの考察　神坂　美帆
中国共産党の階級区分にみられる「出身」と「表現」の問題　杉田　晴子
郷鎮企業は如何に農村に根付いているのか　仲上　高史
幕友の地位における特殊性について　堀口　貴博
清末浙江省における捐納出身者について　前田　和範
満州国による中華郵政の接収について　三品憲一郎
封弥・謄録法にいたる北宋科挙改革に関する一考察川口　章子
纏足起源考　鈴木　敦詞
影絵劇からみたジャワ文化の重層性　堀口　宜映
光復直後における台湾の言語葛藤　矢澤　潤一
陳独秀再論　安藤　豪
一九六〇年代における広州の下放青年の運動　石原　亜希
氷の文化史—朝鮮における氷庫を中心に—　袴田　英征
ブッタート比丘の新仏教改革に関する考察　平澤　正
汪精衛とその時代　三好亜矢子
宋慶齢と宋美齢—近代中国人のねがい—　三輪　章子
前漢武帝の外征と冊封体制　藤本真由美
山越と孫呉政権の支配の拡大について　宮下　岳丈
火という象徴に見るスーフィーの道
—ルーミーの言葉をもとに　植村美佳子
龍涎香の博物志　倉骨　郁子
沙漠を駆ける「風を飲むもの」——アラビア馬とベドウィン
「イスラム都市論」の脱構築に向けて　堀川佐也香
マムルーク朝の中のモンゴル
—「チンギス・ハンのサヤ」に関する考察　松原　康介
アクバル大帝の宗教観と「神聖宗教」　安江晋太郎
アンダルス都市のモサラベ
—セビーリャを中心に　山内加奈子
二〇世紀初頭におけるシオニスト・
ユダヤ人のパレスチナ移住　山下　康之
イラン・イスラーム共和国の宗教と政治　龍福むつみ
阿修羅イメージの歴史的変遷　我妻　知恵
ゾロアスター教の通過儀礼　青砥さおり
モンゴル帝国におけるコプチュルと包銀　葛西いずみ
コーヒーとアラブ　川崎　晋
オスマン帝国と資本主義経済　河村　将博
高橋　暁子

カフカース戦争とシャミール　近田　敦子
中央アジアの目覚め——民族とアンデンティティー　坪井　景子
ホジャ・アフラールとその時代　土田　匡志
ティムールのシリア遠征　富田　陽也
一六・一七世紀のオスマン帝国とムラトⅣ世の改革　長砂　亮平
モンゴル帝国のイクター制と投下　林　浩司
突厥シャマニズム考　弘田　康夫
オスマン帝国治下ボスニアにおけるイスラームへの改宗　星野　協介
メウレウィー教団とベクターシュ教団の比較史的研究　横谷いずみ

〔西洋史学専攻〕

ギリシア二元論とヘラクレイトスにおける変化の法則　羽田　香織
ヘーゲルの社会思想について
—特に個人と社会との連関を中心に　福田　正美
理性と現実が手を結ぶとき
—ヘーゲル自由概念における近代の問題　守屋　徹
思弁との決裂
—一八二八～三九年のルードヴィヒ・フォイエルバッハの哲学的発展行程の特徴づけのために　富村　圭
ハプスブルク帝国—その民族と一八四八年革命　佐々木　理砂
ビスマルクの社会主義者鎮圧法についての一考察　吉田　久美子
ヤスパースにおける歴史認識と自己生成　小袋俊一郎
入浴習慣の消滅と復活　青木由紀子
中世ヨーロッパにおける死について
—黒死病を通して考える死のとらえ方およびその表現　飯田明日香
中世の音——一四世紀の世界から　石原　雅子
フィレンツェ・ルネサンスの衰退　岩村　真理
中世ヨーロッパを襲ったペストの社会への影響
—疫病と公衆衛生史　上田　真優
ナポレオン戦略にみる革命戦争
—ナポレオン革命期の軍事的変化についての考察　小野比呂志
イタリア・ルネサンス期におけるパトロンとしての宮廷　北生　大介
ハプスブルグ帝国の近代化とナショナリズム　小西　将之
黒マリア——その起源について　鈴木みの乃り
中世の宗教劇　立原　理恵
ペストをめぐる諸現象——宗教観と死生観の変化　中尾　治郎
チューザレ・ボルジアのロマーニャ征服
—その要因と功績について　堀口亜樹子
〈慰めの物語〉から見るイエスの意義　山岡　洋一
西欧中世におけるユダヤ人とキリスト教社会　吉川　友浩
プロノイア制について　吉田　弘志
ジョン・ウィクリフについて　井上　友哉

15世紀におけるイギリス農業史
—コスミンスキーとポスタンの比較検討—　金子亜由美
13世紀中世都市社会とフランシスコ会　石田　愛
十六、十七世紀イングランドの州共同体について
—研究史的考察—　久保田貴淑
エリザベス朝におけるパトロネジをめぐる考察　深谷　徹
ガヴァネス問題から見たヴィクトリア朝　北野　素子
十六世紀後半イギリスの救貧法　影山明日香
19世紀前半パリ民衆の「革命的集合心性」における特質　武井　優紀
ヨーロッパにおける魔女狩りについて
—現象の分析と原因の考察—　森　雅哉
フランス革命期におけるフェミニズムの特質
—女性の社会的状況をパリ中心にみる—　大崎真理子
テクストに読む歴史　森　博子
イングランドにおける娯楽暗黒時代を救った旅行業の開拓　伊藤　香織
一九世紀イギリスパブリック・スクールの特質　近藤　晃子
近世フランス重商主義帝国の世界進出とその特質　水津　英樹
イギリスの友愛協会——「自助」思想の帰結——　猪原紀世人
十八世紀フランスにおける里子制とその終焉
—フランスの特異性の原因を探る—　川口　潤子
北アメリカ環境史研究序説
—19世紀までの大収奪と自然保護の黎明—　加藤　哲三
16世紀スペインの対ラテン・アメリカ政策論争　山辺　真理子
『コモン・センス』がアメリカの人々に受け入れられた理由　佐藤　直子
南部の分離—分離支持の多数派の存在—　茂筑　正彦
ポピュリズムとはいえないポピュリズム　鈴木　愛
世紀転換期にるつぼ理論が支持された背景　出光　礼
マックレーカーズの衰退原因
—マックレーカーズという魂と革新主義との絡み—　畑　由紀代
世紀転換期の外交政策の変化の要因
—門戸開放政策における一解釈—　土居　一昭
両大戦間期の対外的姿勢
—「隔絶」か「継続」かをめぐって—　井上　絵里香
第2次世界大戦期の日系アメリカ人の強制収容所における
精神的影響　ラウレル、フランコ・ホセ・R
アメリカ・ユダヤ人のイスラエル移住敬遠の理由　高木　優子
ドイツ第三帝国の女性たち　奥野　敦子
ロシアの農奴解放について　関野　一英
ドイツの対外政策一八七一-一八七八　上浦　一修
総力戦におけるドイツ・メディアの発展について　山崎　愛美
ハンガリーにおける一八四八年革命の問題点に関する考察　青田佳奈子
ドルフス体制のファシズムとしての限界およびその思想的
性格について　阿南　大

アルザス地方における言語政策と
　ナチスのドイツ化政策について　遠藤　節子
ビスマルク外交一八七一-一八九〇　大畠　寛子
モロッコ事件におけるドイツ帝国主義政策　岡本　雅子
オーストリア啓蒙絶対主義的改革の解明　小熊　由美華
南イタリア――ナポリを都としたもう一つのヨーロッパ――　清水　玲子
ドイツの東西分割――冷戦とその起源――　前田　大樹
ドイツ十一月革命におけるSPDの行動について　最上　英蔵
ドイツ経済復興の要因　山岸　誠
Nationそしてその彼方に憧憬するもの　吉川　哲士

〔民族学考古学専攻〕

弥生時代におけるイノシシ類飼育の可能性
　―神奈川県池子遺跡出土動物遺存体の検討　姉崎　智子
北米大陸における象形マウンド　安藤　寿人
静岡県加茂郡賀茂村宇須浜区における若者組と性
ラ・テーヌ期青銅鏡研究　稲生　晋之
「自分語り」と現代史研究　大塚　愛
　―大分県国東半島出身在京女性の生活史調査　大野　裕子
諏訪大社・上社大祝の出自に関する研究　折本　明子
バリ島の民俗方位と屋敷構造　神田　洋子
チアヌ・アチェベとナイジェリア・イボ民族の世界
　―第三世界文学の民族誌学的考察　菊池　晋
古墳時代における頸飾りの考察
　―人物埴輪と古墳出土の玉類より　北川　功
縄文中期末葉の武蔵野・多摩地域　合田恵美子
在日ベトナム人のネットワーク形成と世界観　作道　俊介
飛鳥～白鳳時代における伽藍配置の変遷について　佐藤和佳子
環状列石の天文考古学的考察　佐野　利幸
沖縄におけるユタマンチャーの成立過程　柴田　貞徳
コバー遺跡におけるセトルメントパターン　篠崎　冠
沖ノ島祭祀の検討
　―歴史的背景を中心として　菅鉢　康弘
行間から時代を読む――ペロー、グリム、ディズニーの
「シンデレラ譚」の比較考察　杉岡　有希
関東地方南西部における縄文時代の
　集石遺構について　相馬　容子
現代インドのダウリー自殺
　―イギリス支配のもたらしたもの　高貝　丈滋
西アジア宮殿建築遺構の平面構成
　―ビート・ヒラニの再検討を中心に　高田　学
タイ族社会における〝ムアン〟と〝ピー〟の変遷について　高山　陽子
映画『座頭市』の文化論的考察　千葉　香苗
セツルメントの立地傾向にみる時期変遷と地域特性
　―縄文時代初頭の阿賀野川・信濃川水系域における
　生計戦略と環境適応　土屋　智哉

異類求婚譚にみられる現実的効用　長井　大亮
谷戸の水利と土地利用
—神奈川県藤沢市慶應藤沢キャンパス内遺跡の事例より　中村　弘昌
三角縁仏獣鏡の仏教図像　西尾　玄司
フィジー・トゥカ運動の形成過程について　丹羽　典生
大嘗祭の祭神について　畑農　恒介
開発人類学は開発機構に貢献しうるか
—フィリピン・ラグーナ州カルミエノ地区の
高地開発事例の再検討　藤沢　弘隆
縄文時代中期加曽利E式期における埋甕の様相
—武蔵野台地をフィールドにして　堀田　幸正
リハビリテーションにおける障害受容に関する一考察
—中伊豆での実態調査を通して　堀江　揚子
ジャルモ遺跡におけるブタの家畜化の研究について　吉田　篤
アノニマス・グループに関する一考察　吉田　恭子
先土器時代における少数石材利用の検討
—東北地方頁岩地帯遺跡出土の玉髄を例として　米倉　薫